

2012年度 日本連合基督教共励会ジョイントキャンプ

主題講演

「主われを愛す」

～魂の呻きから讃美へ～

寺田 進

<はじめに>

人口に膾炙した讃美歌「主われを愛す」(461)の魅力はなにか。それは歌詞が時代や場所、状況を越えてすべての人間に語られる「福音」そのものであるからであろう。人間はある一定の状況で、魂の底からの呻きを発するであろう。しかし福音に主イエスの愛の御手に触れた時、人はいやされ、ゆるされ、救われ、自由にされ、主を讃美するように変えられる。「主われを愛す」故である。魂の呻きは讃美へと変えられる。讃美の言葉は「主われを愛す」であろう。その普遍的真理をアフロ・アメリカン(以降「黒人」と記す)の信仰の結晶たる「ゴスペル」から学び、私共の信仰の励みとしたい。

<ゴスペルとは>

それはそもそも福音(良き音信)であり、ここでゴスペルというのは、その福音を歌で伝えるものです。内容はイエス・キリストによる救いの喜びであり、苦難と試練を経た者が証しする福音です。ゴスペルを深く理解するのはキリスト者の特権でしょう。例えば、1969年に全米チャート4位になり、近年、映画でもヒットした「オーハッピーデイ」は「もろびとこぞりて」(112)の作者によるものであり、原詩は「主イエスを知りたる」(516)なのです。

1930年頃に盛んになったゴスペルのルーツの一つは黒人霊歌という信仰の歌で、1760年頃、アメリカ南部の奴隷制の下で生まれた。もう一つは奴隷制廃止後、19世紀末に生まれた、やはり黒人の世俗的な音楽であるブルースです。片や非常に霊的な宗教歌、片やその反対の極みにある世俗歌だが、黒人神学者 J.コーンはブルースもまた黒人の霊的状况を映す世俗的霊歌と呼んでいる。相反する、しかし双子の二つの音楽から「ゴスペル」は生まれました。

<ゴスペルの父トーマス・ドーシー>

彼(1899～1993)は、1920年代、当時流行のブルースの寵児として有名なピアニストでした。父は巡回伝道者、母は讃美歌伴奏者でした。この時代は信仰復興運動の大伝道集会の時代です。そんな時代の雰囲気でした。同時代に、説教者ビリー・サンディー(元大リーガー)がいて、有名なビリー・グラハムも、その説教によって回心しました。想像してみてください。当時

よく歌われたのが「丘の上に十字架立つ」です。三千人から二万人の大伝道集会でのことでした。

ドーシーは22歳の時、伝道師の歌によって回心します。当時、伝道者は歌いながら説教したのです。そしてドーシーもシカゴのピルグリム・バプテスト教会に属してこれからは神の国のために歌い働こうとブルースの世界を脱して讃美歌を作り始めました。それは当時最先端の流行サウンドによる福音メッセージ讃美歌「ゴスペル」の誕生でした。その命名も彼に因るのです。彼の尊敬する牧師にチャールズ・ティンドレイがいます。奴隷の両親から生まれ、解放令ののち、十代で教会に住み込んで働き、夜学で勉強し、三千人教会の牧師になった「ゴスペルの祖父」とも言える人です。作詞も多く、「勝利をのぞみ」(164)は彼の原詩によるものです。

さて、ドーシーにゴスペルの至宝と言われる「プレシャス・ロード」があります(新聖歌191「慕いまつる主なるイエスよ」)これは彼が一度に妻子を亡くす悲劇に襲われ、絶望の淵に陥った時に作られました。彼が伝道集会で歌っている時に、妻が初めての子供を出産する際に息が絶え、間もなく赤子も息絶えたという電報が入ったのです。神に反抗して世俗音楽の世界に戻ろうかと思いつめ、空しく過ごしていたある日、懐かしい讃美歌をピアノで奏でながら、口をついて出たのが「プレシャス・ロード」でした。

慕いまつる主よ、手を取ってください。導いて下さい。

私を立たせてください。

私は疲れ、弱り果て、ボロボロです。

嵐を、闇をくぐり抜けるように私を光へと導いて下さい。

手を取ってください。

主よ、故郷へと導いて下さい。(寺田訳)。

その作曲の時に弾いたメロディーは実に「主にのみ十字架を」(331)でした。その後彼も立ち上げりました。この曲は公民権運動のキング牧師葬儀大集会でも歌われ、今でも感動の嵐を呼ぶ名曲中の名曲です。

< 黒人音楽の歴史的背景と信仰・歌 >

ゴスペルの話をするには、黒人奴隷の話をしなければなりません。メイフラワ号がプリマスに接岸した頃、黒人奴隷は北米大陸に20人いたと言われます。1800年には百万人。1860年には四百万人だそうです。しかし、奴隷船の船底に棺に詰め込まれたようにして三~九ヶ月の航海のため、5人に4人は生きて上陸できませんでした。はじめは西インド諸島の大農場に必要な労働力とされました。やがて三角貿易と呼ばれるそれはヨーロッパ~西アフリカ~北米大陸の海流に乗ったルートで「黒い積み荷」は20%以上の利益がありました。

18世紀後半から奴隷制廃止運動が起こりましたが、皮肉なことに貿易のピークは19世紀前半でした。

さて、奴隷制のもと、彼らは主人の教会で、キリスト教を学びました。彼らは信仰告白書や聖書を丸暗記するほど優秀な上に、福音を薄めるようなあからさまな強制に屈しない自立した信仰でした。しかし、故郷から連れ去られ、自分自身を喪失した彼らは、アイデンティティーを保持しアフリカニズムのもとに結集するように主人の目を盗んでは集会をしました。これは奴隷小屋や森の集会で「見えざる教会」と呼びます。のちに初めてホワイトハウスに招かれた黒人であるブッカー・Tワシントンはその様子をこう伝えています。

「人々は夕暮れ、火を囲みながら何時間も何時間も戦争や、刈りや、深い森の中に住む精霊について歌った…」

やがてこうした集会は「讚美の家」とも呼ばれるようになり、歌いながら彼らの「イエス信仰」を養いました。それは神の超越性よりもイエスの親近性や仲間意識であり、「優しい救い主イエス」の伴いが彼らを集団自殺の誘惑から救い、抑圧や不正義と格闘しながら自由と健康を求める希望とに導きました。

集会では、アフリカ風の特有の発声をもって、「呻き、悲しみ、悲しみ、救い」が表現されたと言います。その口の端に、次第に上っていったのが黒人霊歌と言われ信仰の歌です。きっとリーダーを囲んで何時間も歌われたことでしょう。

「弟子にしてください」(173)は奴隷主ではなく主イエスに従う気概です。「エジプトよ、イスラエルの」(174)は奴隷の地エジプトからの解放を自分たちの歴史に重ねています。「深い川を越えて」(175)は約束の土地へのヨルダン川越えを自分たちの境遇と重ねます。故郷とは天国？あるいは奴隷制のない州？するとその川はオハイオ川とも解せます。「あなたも見ていたのか」(177)の原詩に「罪」はなく、震えるのは自分が受けたむち打ちやリンチの記憶がイエスの十字架での痛みと共に共感するからです。「のぼろう、のぼろう」(181)や「馬車よ、降りてこい」(178)も聖書からの題材で、永遠性のあるメッセージです。

さて、奴隷制廃止以降、彼らの生活に自由と解放が訪れたかといえば、とんでもないことでした。かえって貧困と差別が公然となされ、そこそ彼らの自由への闘いの始まりでした。ただ、南部再建時代以降は、黒人教会が公認され社会的な力を持っていきます。黒人教会ではヨーロッパのアイザック・ワッツ(138、142など)やウェスレー讚美歌を取り入れて消化しました。讚美歌が彼らを鼓舞し、大集会では福音唱歌と呼ばれる黒人による伝道歌が創作され浸透し、教会では「いつくしみ深き」(312)、「イエスよ、この身を」(495)「主われを愛す」、「われをもすくいし」(167)などが自由に即興的に変奏して彼ら風に歌われるようになりました。

その後、20世紀となり、大不況時代前夜ともなると黒人達は何百万人単位で大都市に流入し、貧困と差別の中、世俗的な生活に馴染みます。そこはブルースやジャズの流行する場所で、教会のメッセージは彼らの魂に届かなくなりました。黒人としての誇りとアイデンティティーは失われ、再び孤児となりそうな彼らの魂に「ゴスペル」が届いたのが1930年代です。

それは自分が誰であるのか、ルーツを思い起こさせるもので、流行のサウンドに乗った福音メッセージは、世俗都市の彼らの日常生活を大いに励まし、力を与え、なおかつ今に至る商業音楽の生きた源流となりました。

<主われを愛す>

黒人はなぜ讃美歌を即興変奏して歌うのでしょうか。それはいつも歌っているからです。伴奏がなくてもどこでも歌うのです。だから心の状態によって変奏的になります。どんな苦境にあっても人生の主役は自分ですから自分流に歌うのです。それが力になりました。しかも歌詞は福音ですから元気と慰め励みをもたらします。「主われを愛す」ことを日常的に祈って信じて歌って歩くとその人風の変奏曲になるのです。讃美歌は苦難にある人が歌う主へのラブソングです。「われ主を愛す」です。

奴隷であることを経験した彼らと私達は時代も状況も違うけれども、弱い私達が非人間化の罪の力に立ち向かう時に歌う心の歌は同じです。それは「主われを愛す」という福音＝ゴスペルなのです。

日本連合基督教共励会 理事

日本基督教団 中目黒教会 牧師